

攻撃性の発達と予防的対応

石川 丹

I. はじめに

子どもの育ちにおける反社会的行動、つまり乱暴、いじめ、万引き、触法、犯罪などを考える時、その根としての攻撃性の発達を検討することが重要となる。

攻撃性に含まれる闘争心、つまり、めげずに頑張るぞ、という人間の大切な心情は無闇に否定されるべきではない。誰かに攻撃された時には身を守るために適確な闘争心がなければならないし、相撲、サッカー、ボクシングなどスポーツでは闘争心が大切な要素である。

1) 三つの社会的行動

i) 向社会的行動、愛他行動

他人とトラブル無く仲良く、他人を尊重し、他人を慮った行動を言う。

ii) 非社会的行動

他人と付き合う事を避ける、一人きりの行動などを言う。不登校、引きこもりがこれに相当する。

iii) 反社会的行動

他人を攻撃し否定する行動、社会的ルール、法律を破る行動を言う。乱暴行為、いじめ、虐待、犯罪などがこれに相当する。

II. 攻撃行動とは¹⁾

1) 攻撃行動の分類

i) 反応的攻撃 (= 敵対的攻撃、感情的攻撃、無意図的攻撃、熱い攻撃)

欲求不満、脅威、目標追求の阻止など外的刺激に対する攻撃を言い、否定的感情、つま

り怒りを伴う。この型の攻撃性は幼児期早期から見られる。

反応的攻撃はさらに二つに分類される。

a) 表出性攻撃

怒り感情が表出される場合を言い、言葉による言語的攻撃、殴るなど実力行使による身体的攻撃がある。小学生は中学生や成人に比べて言語的攻撃と身体的攻撃の分化度が低いが、その原因は攻撃行動の社会的抑制力の未熟さによる。

b) 不表出性攻撃

怒り感情を表出せず心の中に抑制した状態での攻撃性を言い、敵意、恨み、ねたみ、猜疑心、影で悪口を言う、などがこれに当たる。

ii) 道具的攻撃 (= 向行動的攻撃、略奪的攻撃、意図的攻撃、冷たい攻撃)

食物、金銭、遊具、地位などの目的達成のために攻撃行動を道具的に使う場合を言い、学習によって獲得される。

無視、仲間はずれにする、などは関係性攻撃と言う。

2) Dodge の社会的情報処理の理論

Dodge らは、攻撃行動形成の心的機序 (情報処理過程) には符号化→解釈→目標の明確化→反応の検索・構成→反応決定→実行という6つのステップがある、と考えた。

他者との関係において生じた事態の変化、つまり環境からの刺激に注意が向けられる段階が符号化である。

刺激は長期記憶と照合されて意味付けさ

れ、自分が置かれている社会的状況の解釈がなされる。この場合の解釈とは自分が相手から攻撃されているのかどうかという判断に相当する。

その上で相手に対して求めるべき結果の追求、つまり目標の明確化をする。

次いで、その場で取り得る行動が過去の経験、つまり記憶と照合される形で検索され、取るべき行動が構成される。

取るべき行動は結果の予測と自己効力（難易度）という二つの観点、つまり攻撃行動をしたら相手はどうなるか、その攻撃行動は自分にとって簡単に遂行できるのか、を考えてから決定される。

そして行動化される、これが実行である。

3) 攻撃行動のタイプ

i) R型

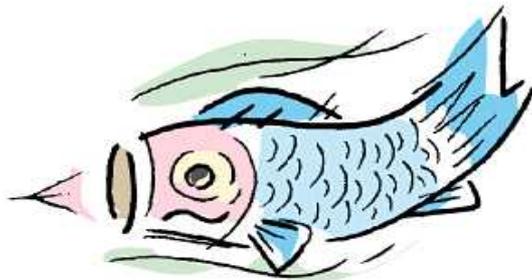
反応的攻撃が優性な場合を言い、情報処理の前半部（符号化、解釈）に問題がある。

ii) P型

道具的攻撃が優性な場合を言い、情報処理の後半部（主に評価）に問題がある。

4) 敵意帰属バイアス

加害者の意図をことさら悪意に解釈する傾向を敵意帰属バイアスと言う。例えば、偶然他人の手が当たっても、相手が意図的に叩いたと解釈する場合を敵意帰属バイアスが高いと言う。



III. 子どもの攻撃性

1) 攻撃的な子どもの特徴

敵意帰属バイアスの高い子ほど報復的攻撃行動を取り易く、攻撃行動を取り易い子は相手の意図を敵意と思い込み易い。攻撃的な子どもは年齢と男女を問わず敵意帰属バイアスは高い。多動を伴った攻撃的な子どもは、同年齢のそうではない子どもに比べて敵意帰属バイアスが高い。

攻撃的な子は相手の悪意を支持しない手掛かり刺激、つまり情報が沢山ある場合でも、悪意を支持する少ない情報を重視し易く、また「自分は仲間から嫌われている」というセルフスキーマ（過去経験を反映した一種の自己概念）を持っていることが多い。こうしたセルフスキーマは過去に敵意にさらされた経験が多い場合に形成されやすい。

被虐待児は敵意帰属バイアスが高い。しばしば叩かれたり、いつもダメダメと言われ否定されている子が敵意帰属バイアスが高いのは当然の成り行きである攻撃的な子は仲間との架空の葛藤場面で、自己の欲求の実現を目指す目標（個人的目標）を設定する傾向が強く、個人的目標と相手との関係を維持しようとする目標（対人関係的目標）とをバランスよく調整する傾向が弱く、自己中心的防衛的である。

仲間に人気の無い子は（社会的不適応児）は問題解決方略のレパトリー数が少なく、レパトリーの内容も言葉による効果的主張的なものは乏しく不適切攻撃的なものが多い。また、命令すれば自己の欲求がかなえられ、脅迫を行っても相手の感情を損ねないというふうを考え易い。

攻撃的な子は攻撃行動によって物的報酬

や自己満足が得られ、かつ自分が嫌な扱いをされなくて済むというふうに考え易い。

2) 攻撃性の発達モデル¹⁾

攻撃性の起源には遺伝による気質的要因と環境要因があるが、遺伝と環境の要因は五分五分であると一般的には考えられている。

第1段階；気質に左右される段階

嫌悪事象に対する感情反応である怒りの発生には、まず気質的に怒り易いかどうかに関係する。

第2段階；怒りに結び付いた行動とその効果に関する学習が生じる、条件付けの段階

怒りことによって効果が得られると、怒りと攻撃の結びつきが学習され、高い攻撃性につながる。反応的攻撃と道具的攻撃は未だ分化していない。因みに、怒りの経験が少なかったり、怒りに基づく攻撃によって効果が得られないことを多く経験すると攻撃性は低くなる。

第3段階；攻撃の認知的発達段階

自分を取り巻く世界が友好的で安心できるものなのか、逆に非友好的で敵対的なものなのか、という基本的信念が形成される段階で、自分の行動が他者に有害な結果を生じさせること、攻撃が嫌悪事象を除去し葛藤事態を解決する有効な手段となることを理解するようになると、ある行動を取ることによって利得を得られることを知った上でこれを行うようになる。つまり意図的攻撃行動の発生である。

こうした認知プロセスが反応的攻撃と道具的攻撃を分化させ、意図的な攻撃目標の形成に結びつくのだが、それを左右する要因の一つには母親の養育態度がある。

乳児期からの母親の拒否的養育態度、つまり「だめっ！」と言うなどの否定が多いと、子どもは怒り体験が多くなり、ちょっとしたことで怒りっぽくなってしまい、敵意帰属バイアスが高くなってしまう。ために基本的信頼感が成立せず、敵対的な外界から自分を守らねばならないという基本的信念を身に着けてしまう。母親に対する不信感が普遍化され、子どもは外界の脅威への情緒的反応パターンを促進させてしまう。

逆の、早期の母親の受容や無制限の暖かさは怒りの条件づけを最小にし、基本的不信感や外界の脅威という認識の形成を抑制する。ただし、幼児期後期の母親の暖かさがルーズな許容という形で子どもに受け止められると、攻撃へのポジティブな報酬の経験を積み重ねさせることになるため高い攻撃性につながる。



IV. ぐずり易い子、育てにくいと写る子

1) 気質

乳児を性格的特長によって分類すると easy infant, slow to warm up infant, difficult infant に三つ分けられる²⁾。

三番目の難しい気質の子とは否定的な感情を頻繁に強烈に表出し、怒りっぽくてぐずり易い子を言う。乳児期に難しい気質を示す子は幼児期に攻撃的になる危険が大きいと言われている。

2) 1歳0ヵ月児の愛着行動の類型

母子で居る部屋に見知らぬ女性が入室し代わりに母親が児を置いて退室、1～3分後に母親が戻った場合の子どもの行動を、エインズワースという人が観察したところ次の三つに分類された。

i) 回避不安定

分離時不安を示さず、再会時母を避ける(0～20%)

ii) 正常安定

分離時多少の不安、再会時母にすがりつく(60～70%)

iii) 両価不安定

分離時強い不安、再会時母にしがみつき叩いたりして怒る(10～30%)

三類型の子どもの割合は括弧内に示すようにアメリカでもドイツでもケニヤでも日本でも概ね同じである。両価不安定型の子が難しい気質の子に相当する。

3) ぐずり易い子、育てにくいと写る子

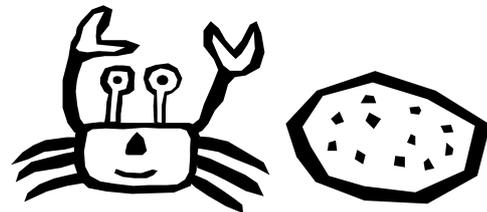
エインズワースの言う両価不安定型の子は、日常生活の中で親にとってはぐずりが強く育てにくい子と写る。親子間の葛藤はだんだんに多くなり、幼児期には親の子に対する拒否感が強くなってしまふことがある。

4) 「もっと愛して」行動

ぐずりは子どもが満足できていないことの表現である。言語表現が不十分なため表象(思い)を正確に言語化できない0～1歳児は、行動表現を主要な伝達手段にする。母親の非言語的コミュニケーション努力は乳児期には日常的に行われているが、母親側からの発信が意にそぐわない場合、子どもはnoとしてぐずりで答える。母親があやしたり、なだめたり透かしたりしてもぐず

りが納まらない場合は子どもの要求水準が高過ぎると考えるべきである。母親にすれば手を焼く事態なのだが、子どもからすれば「もっと愛して」を表現していることになる。有島武郎は「惜しみなく愛は奪う」という小説を書いた。

「お母さん、この子がぐずるのは『お母さん、もっと愛してよ』と言ってるのですよ。お母さんはうれしい悲鳴を上げていることになります。ぐずりが続くのは『こうじゃない、それでもない』というこの子どもの表現だから、この子は頭が良いということです。『試される大地』という北海道のキャッチフレーズがありますが、お母さんはこの子に試されていることになります。ありがた迷惑かもしれませんが、今まで以上にこの子と付き合ってください。」と説明する。



V. 攻撃性が育たないようにするには

1) 自己調整機能(自己主張と自己抑制)

幼児期早期に見られる仲間との物や遊びを巡るいさかい場面においては、自己主張の延長上に攻撃行動がある。しかし、子どもは多くのいさかい場面を通して対人葛藤を経験し、大人からの介入や仲裁を介して攻撃性が強く育つことなく、より適応的な自己主張手段を学んで行く。

2) 敵意帰属バイアスの高い子に対して
敵意帰属バイアスの高い子に対しては、大人が相手の真意、あるいは悪気が無いことをその都度説明し納得させることができ

れば、攻撃性を育たないようにすることができる可能性がある。

3) 空想と攻撃性

Klinger³⁾ は攻撃的な空想をより多く経験した人は現実の攻撃行動を示すことは少なく、一方、空想遊びやごっこ遊びを通して怒りや攻撃性を処理してこなかった子どもや大人はこれを実際の攻撃行動として表出することが多い、と結論づけている。

4) 攻撃性が育たないようにするプログラム

ロールプレイ、劇、ペープサレートを使っていじめ役、いじめられ役をそれぞれ演じた後に、いじめられた人の気持ちを言い合い、いじめられた人の気持ちを理解するように仕向ける。

5) 「褒めるところありません」と言う母親に対して “no problem”

アメリカ人が子どもを褒める時は “no problem” と言う。直訳すると「問題ない」であり、日本語的に言えば「オッケーだね」「それでいい」「できたね」ということである。だから褒めると言うよりは承認ないし同意、受容である。こう考えれば承認ないし同意できることは子どもの中にたくさん見つけれられるようになるだろう。

普段できているボタンはめが出来たら “no problem”、靴紐を結べたら “no problem” とアメリカ人は声掛けする。日本なら味噌汁を全部飲んだら「よく飲めたね、オッケー」、手を洗ったら「出来たね、きれいになったね」というふうに声掛けすれば、子どもは認められたことを実感し、引いては褒められたと思うようになるだろう。

6) 愛他行動を育てよう

1歳過ぎると子どもはお腹を痛がってい

る人の腹部をなでたり、人に物を持って来てあげるなどの行動をする。2歳過ぎると苦しむ人に慰めの言葉をかけたり、鼻水が出ている人にティッシュを取って上げる、母親の家事を手伝う、などの行動をする。

こうした他人を愛でる行動の発達は親の養育態度に影響される。子どもの要求に敏感で愛情あふれる養育態度、他人の気持ちを尊重しつつ子どもの意志との兼ね合いを説明的にする躰は、子どもの愛他行動を育てる。

断定的禁止、力、体罰、物でつるしつけは逆に攻撃性を促進する。

7) 5歳児の罪悪感、共感性、役割取得能力

悪い事をした時に生じる相手に謝りたいという気持ちを罪悪感と言い、他人と同じ情動経験をすることを共感性と言い、他人の思考を理解する能力、他人の立場で考える能力を役割取得能力と言う。石川ら⁴⁾によれば、他人の心を傷つけてしまった場合には共感性の高い子が罪悪感が強く、規則を破ってしまった時は役割取得能力の高い子が罪悪感が強い、という。

幼児のいさかい場面では善悪をきちんと教える躰が大切であることは言うまでもない。



VI. DBD マーチ (Disruptive Behavior Disorders = 破壊的行動障害)
注意欠如多動障害 (ADHD) の子が長じて反抗挑戦性障害 (Oppositional Defiant Disorder, ODD) になり、さらに行為障害

(Conduct Disorder、CD) になって犯罪を犯す危険が高くなることがあることは、アメリカではずっと以前から知られている。

ADHD→ODD→CD によって行くことを DBD マーチという。

以下の 8 項目のうちの 4 項目以上があれば反抗挑戦性障害 (ODD) と診断される。

- (1) しばしばかんしゃくを起こす
- (2) しばしば大人と口論する
- (3) しばしば大人の要求や規則に従うことを積極的に拒否、反抗する
- (4) しばしば故意に他人をいらだたせる
- (5) しばしば自分の失敗、無作法を他人のせいにする
- (6) しばしば神経過敏、他人からいらさせられ易い
- (7) しばしば怒る、腹をたてる
- (8) しばしば意地悪で執念深い

VII. ADHD の子への対応、二つ先のアナウンス

ADHD の子は自分の予定した行動を規制されること、つまり自分を否定されることが多く、そのため「予測と違ってガッカリ」感を何回も経験している。「ガッカリ」感、失敗体験が多くなればなるほど、「ダメ！」に対する反発は当然強くなる。反発は親からすれば反抗と映るようになるので、親はさらに抑えつけようとして悪循環に陥る。

だから、大人は子どもの成功体験をたくさん作るように意図的に関わるのが非常

に大切なことになる。子どもに成功感を植え付けるためには「二つ先、二つ手前から、のアナウンス」が有効となる。

熱中している遊びを中断させたい時は順に「後二回遊んだら止めよ」「後一回よ」「さあ、止めよう」と声掛けして中断への心の準備をしやすいように仕向ける。

「予定通りでニンマリ」感、つまり成功体験を増やすには次から次へと二つ先の予定行動を順次子どもに伝え続けることが有効になる。例えば、「ご飯食べ終わったら歯を磨いて、その次はトイレよ」、「歯を磨き終わったらトイレで、次は出かけるから玄関で靴を履こうね」、「おしっこ終わったら靴を履いて車庫に行くよ」、「靴を履いたら車庫に行ってお父さんの車に乗るよ」、～と⁵⁾。

引用文献

- 1) 山崎勝之；攻撃性の行動. 科学-発達・教育編-. 2002. ナカニシヤ出版、京都.
- 2) チェス、トマス；子供の気質と心理的発達. 1981. 星和書店、東京.
- 3) Klinger, E. ; Structure and functions of fantasy. 1971. NewYork: Wiley-Interscience.
- 4) 石川隆行；5歳児の罪悪感に共感性と役割取得能力が及ぼす影響について. 教育心理学研究 49:60-68, 2001.
- 5) 石川 丹；動きの多い幼児への対応 臨床小児医学 49:55-59, 2001